

分かりやすく、おもしろく、  
買いやすく、売しやすい

## 伊藤若冲の市場

藤田一人 文

ふじた・かずひと 1960年、大阪府生れ。美術ジャーナリスト。新聞、雑誌で美術評の他、美術市場や文化行政に関する記事を執筆。社会的見地から幅広く日本の美術状況取材。中央大学兼任講師。

特に市場に影響を与えたとは言い難い。では、そんな若冲の市場の現状を具体的に探っていくことにする。

等、価格や図柄のバリエーションがある。

もう一つ、一般の人々が美術作品を購入する場として公開オークションがある。なかでも、日本の大手オークションの一つである毎日オークションでは、2014年に8点、2015年も8点の若冲作品が落札されている。同オークションの安藤博太郎さんは「ここ4、5年、古軸（古画の掛軸）が見直されていて、若冲に限らず出品数は増えていきます。価格的に割安感があり、また落札率も高いので、安定感があると思われるのかもしれませんが」と言う。

そこでも若冲の作品は大半が墨絵で図柄は鶏が多い。価格は作品によって異なるが、エステイメイト（落札予想価格、以下E）はおおよそ100万〜200万円というところが主流。最高落札価格は、2015年3月14日のオークションでの墨絵《鶏図》（113・8×26・6cm E200万〜300万円）の520万円。最低落札価格は2014年9月3日の《端午銚物之図》（109・7×29・1cm E80万〜120万円）と2014年11月8日の《芭蕉図》（106・5×27・5cm E80万〜120万円）の80万円で、共に墨絵。ちなみに、今年2月13日のオークションでは、墨絵の《花鳥図》（11

近年、近世絵画の愛好家に留まらず、現代美術も含めた日本の美術ファン全般に、伊藤若冲のブームが続いている。当然それは美術市場にも影響を及ぼしているだろう。昨今の若冲作品の市場、特に作品数の多い墨絵の市場はどうなっているのか。今回、それを探るに当たり、編集部から3つの設問がなされた。

①今日の美術市場で若冲の作品は買えるのか？

②買えるとなると、価格は如何程か？  
③今日のように若冲人気が高まったきっかけは、2000年に京都国立博物館で開催された若冲展だとされるが、市場もその影響を受けているのか？

まずは美術商に話を聞いてみると、「若冲は業者の交換会等で、年に数点は見かける。大半が墨絵で、図柄は鶏が多い」と複数が答えた。そんななか若冲を精力的に扱っている加島美術の加島林衛さんは「確かに市場に出てはきますが、近年は希少性が高まっています。私も毎年2回販売カタログを発行しているのですが、各々2、3点を確保するのがやっとというところですよ」と言う。ちなみに、2014年に刊行された同カタログ「美祭15」と「美祭16」には、各々3点の若冲作品が掲載されている。掲載作はすべて墨絵だが、《菊図》（76×28cm 110万円）、《虹豆下鶏図》（125×50cm 210万円）、《亀図》（110×28cm 380万円）、《蔓荔枝下雄鶏図》（126×50cm 380万円）



東京・加島美術の最新カタログ「美祭19」に掲載の若冲《芭蕉叭々鳥図》。紙本水墨 105×29cm 380万円 問合せ03327610700

9・3×46・1cm E120万〜180万円）が280万円で、彩色画の《伏見人形布袋図》（48・8×19・9cm E50万〜80万円）が53万円で落札された。

こうして数字を見ていくと、エステイメイトや落札価格に結構落差があることが分かるが、それは作品状態や真贋等の見極めは落札者の自己責任と言われるオークションならではのところか。ただ、安藤さん曰く「私どもは若冲をはじめ古軸を、『古美術』部門ではなく、近現代作品と同様に『絵画』の部門で扱っています。そこでは原則として鑑定書を取ってもらうようお願いしています。もちろん、出品者の都合で取られない場合もあります。が、昨今のオークションでは、たとえ古画であっても、鑑定がないと通用しなくなってきています」。少なくとも真贋の面では、今日の流通基準に適合しているというわけだ。

ある美術商は、「毎日オークションには業者の参加も多く、おおよそエステイメイトの下限付近で落札されたものは、業者が落札している場合が多い。一方、上限かそれを超えるものは、一般のコレクターが競っていると見る」とが出来る」と言う。つまり、同オークションのエステイメイトは、業者価格と一般市場価格の間で幅を持たせて

付けられているということになるのだろう。

ところで、従来、伊藤若冲の再評価は海外のコレクターによるものだとされてきた。ゆえに、海外のオークションでも若冲作品は登場する。たとえば、2005年9月22日のクリスティーズ・ニューヨークでは墨絵の《鶴図》（82×34cm E4万〜6万ドル）が4万2000ドル（当時のレートで約470万円）で落札されている。こうした海外の市場について、先の加島さんは「以前は海外での取引も多かったのですが、最近では、国内の需要が多くなって、海外にまでは回らなくなってきたというように」と語る。

少なくとも時間さえかければ、日本の美術市場で若冲の墨絵は手に入る可能性が高いことが分かる。しかし、《動植綵絵》のような極彩色絵画はほとんど市場には姿を見せず、出てきたとしてもかなりの高額になることは予想できる。実際、2008年9月18日のクリスティーズの「日本・韓国オークション」で落札された絹本着色の《梅鷹図》（下）の価格は墨絵のざっと10倍の36万2500ドルであった。

最後に2000年秋、京都国立博物館で開催された特別展覧会「没後200年 若冲」と若冲の市場の人気の関

係だが、その問いに関して、加島さんはこう答えた。「もともと若冲の価格がそんなに高くなかったために、近年価格が上がっていることは確かです。しかし展覧会を機に急騰したということはないでしょう」。さらに、「私の印象では、若冲は以前からデザイナーの方々に人気があり、お買い求めになるお客様も多かった。若冲の華やかさや強さのようなものが、デザイン感覚をそそのかすのでしょうか。近年、そうした嗜好の客層が広がったということはあるかもしれません」と。

若冲は面白くて分かりやすい。作品数も少なくはないし、比較的買いやすく、売しやすい。そういう意味では、以前から若冲は結構人気がありました。市場の状況はさほど変わっていないといえるでしょう。

そして、毎日オークションの安藤さんも、「少なくとも、私どものオークションで若冲の出品が増えたのはこの1、2年のこと。遡ると、2010年には1点落札があるだけで、その後2年間はなく、13年にも1点だけです」と、2000年の若冲展を境とした若冲の市場的活況説には懐疑的だ。

近年の若冲ブームに対し、美術館やマスメディアに比べ、美術市場は比較的冷静だというわけだ。



クリスティーズ・ニューヨークで2008年9月18日に36万2500ドル（手数料込、当時のレートで約3800万円）で落札された絹本着色の若冲《梅鷹図》。120・5×54・7cm エステイメイト30万〜40万ドル ©Christies Images Limited 2016